

店頭にも、早稲米の新米が並ぶ季節になりました。秋収穫の水田でも、稲がぐんぐん伸びています。皆さんは、水はけを良くするため、土の下に、小さな穴のあいた管が通っている水田があるのを知っていますか？ 地表や地中の余分な水を管に集めて流す「暗渠排水」です。東日本大震災で津波をかぶった水田の復旧にも生かされています。今回の知り隊は、ちよびりディープに、水田や畑の地下にある暗渠排水の世界に迫ります。

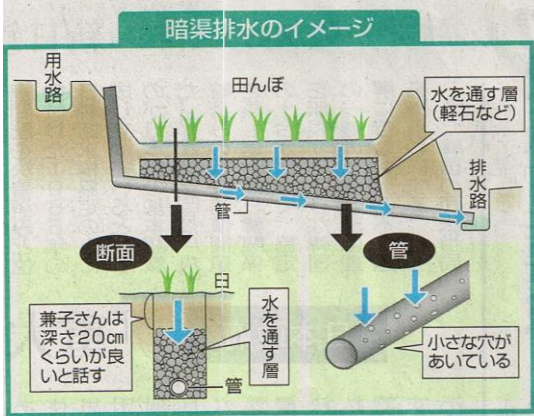
(大路秀紀)



水田の下に「水路」

まずは押さえておきたいのは、「暗渠排水」は熊本にゆかりの深い技術だということ。その中で、水田の水はけを良くする画期的な排水法が生まれまし

ます。明治時代、日本の平野部には、水はけが悪く一年中ぬかるんでいる水田「湿地」が数多く見られました。湿地は、地中の



では、田を耕すなどの農作業が困難で、コメの収量も少ないのが悩みの一つ。そんな中、水田の下に排水路を完成させます。現在の暗渠排水の原型。方法は全国に広まり、コメ作りの生産性を向上させました。

水はけ良くして生産向上



◇かねこ たけお
1944年、熊本市生まれ。鹿児島大学大学院修士課程修了。熊本県農業試験場や同県農業研究センターなどで暗渠排水を研究。現在は三浜測量設計社(熊本市)勤務。農学博士。

元県職員で、県土地改良専門技術者会会長の兼子健男さん(69)は、熊本市では、暗渠排水の研究を30年以上続けています。歴史と実績がある暗渠排水ですが、兼子さんは「暗渠排水の機能をもっと生かす方法がある」と指摘します。

その一つが工法。現在の暗渠排水では、地中の水が管まで十分に染み込むよう、土と管との間に水を通す層(軽石など)を使います。現在は、

「暗渠排水が本来の機能を発揮すれば、日本の水田は今以上の生産性を発揮できる。麦や大豆の収量もアップし、39%と低迷している食料自給率の向上にも役立つ」。兼子さんは、熊本ゆかりの技術を正しく普及させたいと話しています。

東日本大震災で津波の被害を受けた東北地方では、水田に残った塩分を洗い流すため、

＝随時掲載

熊本にゆかり深い技術 東北の塩害復旧に一役